

沈黙の対話術

小野 寺 賢 一

ヴァルター・ベンヤミンがその青年期に構想した「対話」の理念的形式は、プラトンの『饗宴』の批判的読解を通じて構想された。ベンヤミンは『ソクラテス』において、ソクラテスの問答法はその内的原理とされるエロスを、愛人に自身の答えを「孕ませる」ための単なる手段として用いていると批判する。この問答法に対置されるのが、答えを孕ませることとは無縁な、相互的な認識の高進過程としての「対話」である。最終的な答えをもつことのないこの「対話」は、彼が対話篇『愛についての会話』において示した、自己自身の「表明」のみがその唯一の存在様態である愛を原理とする。この「対話」における純潔性は、『ソクラテス』においては「表現を欠いたもの」として、また『青年の形而上学』の〈会話〉の章においては、「沈黙」という観念によって表現される。相互的「対話」が自ら産出する「真の言語」と呼ばれる沈黙は、愛の純潔性を保証しながら、その存在様態である自己表明の極点を、否定的表出としてもっている。ベンヤミンは、「対話」を構成する両者の自己認識の充溢を唯一の目的とし、その絶対的表出を沈黙としてもつ、このような「沈黙の対話」の形式を、『虹——想像力についての対話』という対話篇において具体化した。

主体と客体が両者の絶対的統一のもとで構成する認識の高進過程である「対話」は、ベンヤミンの博士論文『ドイツ・ロマン派における芸術批評の概念』において、「反省媒体」という概念のもと、より洗練されたかたちで提示される。反省媒体とは、自我による非我の一方的な対象把握という図式を廃した、両極的・相互的反射運動としての認識のあり方を意味する。認識する等価な二つの極によって構成される反省媒体は、終わりをもたない充溢した自己拡張の運動でありうるが、しかしその一方で、自己制限というもう一つの側面ゆえに、忘我という熱狂の境地からは切り離される。反省媒体におけるこの自己制限の側面の原型となったものこそ、「沈黙の対話」の形式における沈黙にほかならない。

ベンヤミンは、反省媒体の自己制限的側面を意味するものとして、ヘルダーリンの詩行から導き出した「冷静さ」という要素を、自身の批評的論考『ゲーテの「親和力」』において、やはりヘルダーリンが『「オイディプス」への注解』で用いた用語、「韻律においてツェズーアと呼ばれるもの」の言い換えであると断言し、これを自身の用いた概念である「表現を欠いたもの」と結びつける。ベンヤミンによれば、ツェズーアにおいては「調和と同時にどんな表現も身を伏せる」のだが、それは「いっさいの芸術手段の範囲で表現を欠いている威力に場所を空けわたすため」である。ツェズーアとは、その表出媒体であるはずの言語を絶した表出であり、言語それ自体が否定的に自己を表出する場でもある。『青年の形而上学』において「対話」の極点として規定された、真の言語としての沈黙とは、このいかなる芸術手段の内部でも表現を欠いている威力、「表現を欠いたもの」が否定的に表出する場を、対話形式において表したもののなのである。